

4 戦車隊とともに―青年下士官

昭和十七（一九四二）年八月、岩手県盛岡市に戦車第二十二連隊が編成された。陸軍兵器学校を卒業したばかりの瀧川巖は、戦車の整備や部品の供給などを任務とする兵器廠の下士官（伍長）に配属された。助教（教官助手）として、中隊に配属される召集兵の教育訓練にも当たった。

「金ボタン」脱ぎ捨てエンジンと格闘

兵器廠には約三十人の工兵が配置され、階級は下の者でも年齢は十歳ほど上で、整備などの技術力も優れていた。兵器学校で基礎的な知識や技術は身に付けていた巖は、組織上は彼らを指導する立場にあったが、時折、周囲の冷たい視線を感じることもあった。

「世間知らずの子供と映っているのだろう」

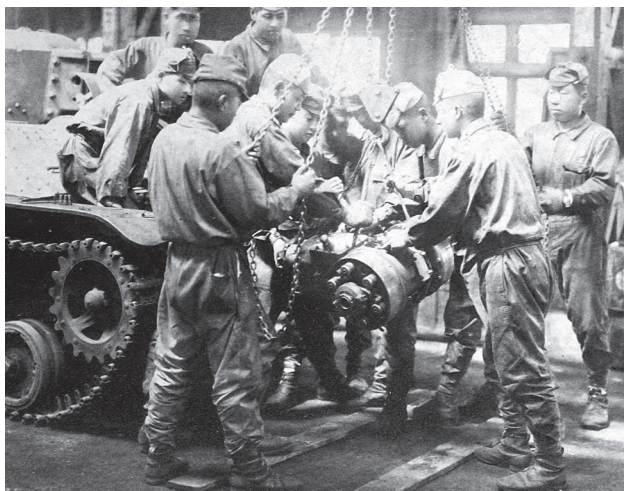
「理論には技術が伴わなければやっぱり意味がないんだ」

―そう実感したが、学校時代のような先生はもういない。元来、それほど器用でもなかった。

「ならば、見よう見まねで努力するしかない」

明くる日から、まだ折り目も新しい制服を脱いだ。兵士たちと変わらない作業服に着替えると、自分から分解や修理に汗を流した。

連隊に配備されていた戦車は、エンジンはじめ機械周りはかなり高性能で、時代の先端を行っていた。しかも、民生用の自動車はガソリンエンジンが主流であったため、修理の経験がある者ほどディーゼルエンジンの扱いに戸惑うことが多かった。



巖は不器用ではあったが、機械のことなどまるで知らずに飛び込んだ世界だったことが逆に幸いした。兵器学校で学んだ理論的な裏付けが、直接機械に向き合うことで実践力として確かなものになっていったのだ。

この経験は、やがて続々と送り込まれてくる「機械には白紙状態」の新兵を短期間で育成する上で生かされた。

「難しいけれども、大きなやりがいを感じた」

汗と油にまみれた盛岡時代は、人間・灌川巖の生き方の重要な土台ともなった。

しばらくは、静かな日々が過ぎていった。夜の兵舎には、こんなメロディーも流れてきた。

山の淋しい湖に

ひとり来たのも悲しい心

高峰三枝子が歌う「湖畔の宿」（作詞・佐藤惣之助、作曲・服部良一）。戦時下に

あつてあまりにも感傷的な曲調のために一度はレコードの発売が禁止された。ところが、南方戦線の兵士の間で愛唱されるに連れて大ヒット曲となった。

休暇には、歌人・石川啄木が育った渋民村を訪ねたこともあった。

しかし、桜の花の香りに酔いしれた日も束の間。内地にあつても軍の動きが慌ただしさを増してきた。

盛岡から帯広へ、本土決戦に決死の備え

昭和十九（一九四四）年。戦車第二十二連隊の帯広移駐が決まり、兵器廠の堀正教官はじめ灌川巖を含む数名にも転任命令が下った。階級は軍曹に昇格。

「北海道の出身だから自分も選ばれたのだろうか」

そんなことも思ったが、一将兵の想像を越える次元で事態は動いていた。

太平洋戦争の戦況は、連合軍の攻勢から最終局面へとという大きな流れにあった。

「死の行軍」となったインパール作戦の失敗（三月）、サイパン陥落（六月）で南方戦線は壊滅状態に陥り、米軍のB29爆撃機による本土空襲も始まった。遠くヨー